

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊第1号

2011 SANSEIDO

特集 

自ら学ぶ力を育てる

2012（平成24）年度改訂版 *NEW CROWN* について①



この資料は、社団法人教科書協会「教科書宣伝行動基準」に則って作成しております。

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊第1号

TEN 特別増刊第1,2,3号は、新しい24NCの内容を詳しくご案内します。
第2号は3月末、第3号は4月末の発行予定です。

本誌では、24NEW CROWN を24NC と略記することがあります。

CONTENTS TEN 特別増刊第1号

NC つれづれ草

- 01 A textbook is a textbook is a textbook. 森住 衛
良い教科書を作ろう 齋藤 榮二

特集 自ら学ぶ力を育てる

- 02 いま英語教育に求められているもの 高橋 貞雄
04 学びのプロセスを意識した授業づくり 松沢 伸二
06 USE Read の仕組みと活用の仕方 池野 修
08 「気づき」をうながし、自ら学ぶ発音指導へ 田邊 祐司
10 コミュニケーションへの意欲をどう持続させるか
—小学校から中学校へ 重松 靖
12 辞書を積極的に活用する 森 千鶴
14 付録の活用法—自身の世界の著者になる 田嶋 美砂子

教科書製作現場の風景

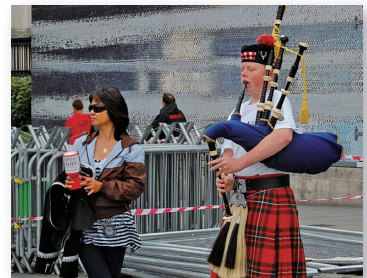
- 16 イラストレーター加藤アカツキさんのオフィスから 加藤アカツキ



表紙写真について

Trafalgar Square in London

ロンドンのウェストミンスターにあるトラファルガー広場にて。
世界各国から観光客が参集する観光の名所。ストリート・ミュージシャンたちが思いおもいの楽器をかなでている。そんな中にバグパイプ吹きの少年がいた。すぐ左には女性マネージャーが。いささか殺風景な鉄製フェンスを背景に、バグパイプのくぐもった勇壮な音がひびきわたる。これも現代ならではの光景だろうか。2010年秋。
[24NCでは、1年のレッスン6で、ブラウン先生がバグパイプを紹介しています] (編集部)



写真：© 成田 希

24NC はこんなに変わった ①

生まれ変わった新しい24NCの姿を、3回に分けてご案内します。
詳細については、第1,2,3号2ページ以下の各編をご覧ください。

- ★各レッスンを大きくGET「習得」とUSE「活用」の2部構成に。自ら学ぶ力が身につくように工夫しました。
- ★各レッスン末に「文法の要点」を配置。文法知識の「確認」ができるようにしました。
- ★Book1 冒頭にGet Ready を設置。小学校の「外国語活動」とのスムーズな接続を図りました。[文字の導入、つづりと発音など]
- ★辞書指導、SOUNDS、絵でわかる英語のしくみ、いろいろな単語などを充実。自ら学ぶ力を育てるためのさまざまな工夫を随所に配しました。

NC つれづれ草



森住 衛 (桜美林大学)



齋藤 榮二 (京都外国語大学)

A textbook is a textbook is a textbook.

最初から私的なことで恐縮だが、私の大学時代の恩師は江川泰一郎先生である。共通の趣味は将棋であった。その江川先生が、あるとき将棋を指しながら、ふと「森住くん、辞書と教科書には関係ない方がいいよ」とおっしゃった。「なぜですか」とお聞きすると、「細かいことが多くて、エネルギーを使うからね」とのお答えだった。

恩師のこの忠告にもかかわらず、私は辞書と教科書に関与してきた。特に、教科書とは、それも中学校の *NEW CROWN* とは、長い付き合いである。初版(1978年版)の編集からなので、かれこれ35年になる。改めて思うに、教科書を通して生徒と「直接接合」できることが、私の英語教育研究に対する姿勢と合っていたからだろう。

教科書は、生徒たちの英語学習の拠り所の最たる教材である。教科書を通して、英語そのものだけでなく、英語に対する考え方、そして、言語観や異文化理解観を学ぶ。たとえば、「技能だけでなく伝える内容(題材)も大切にす」「英語教育が英米理解になってはいけない」「英語だけでなく他の言語にも目を向ける」等々、いろいろな「観」が教科書によって育まれる。これはとりわけ、自己や社会を意識し始める中学時代に顕著であると思われる。

このことを最初に感じたのは、大学で英語科教育法を担当し始めた頃である。受講生の言語観・文化観・世界観が大きく分かれているのが気になった。そこで、その違いの源をたどっていくと、大半が中学校の教科書に行き着いた。「教科書で知った」「教科書に書いてあった」などという返答が多いのである。3年間読んだり写したりしていたら、影響を受けるのは当然である。まさに *A textbook is a textbook is a textbook*. (たかが教科書、されど教科書) である。教科書を編む側、選ぶ側の責任は重い。

良い教科書を作ろう

「良い教科書を作ろう！」そのために全力を尽くしてきた。願いはただ一つ、「人の心の豊かさ、悲しさ、そして楽しさ、つらさを生き生きと表現している言葉は、世界中に存在している。そういう生きた人間の心のメッセージを生徒とともに探ろう」ということ。

私たちは、*NEW CROWN* で *I have a dream*. をとり上げる。キング牧師が、“Even if people hurts us, we must hurt no one. We must have the courage to refuse to fight back. We must use the weapon of love.” と語りかけるとき、この言葉こそ、まさに私たちの目の前にいる「キレル、ムカツク、ナイフを振りまわす」中学生に伝えるべきメッセージではないか。

Diminutive Giant と呼ばれる日本人がいる。「小さな巨人」。確かに1メートル50センチ台の小柄な女性。しかし、世界中を駆けめぐり、これほど多くの難民の命を救った人物はいないのではないか。その人の名は、緒方貞子。

“All the children in the world have their right to live with their families, the right to go to school in peace and the right to grow up in safety.”

中学生ともなれば、一人一人が発展途上にある可能性を秘めた知的存在だ。世の中のさまざまな現実を知り、その中に生きる存在としての自分自身のありようを考えはじめる年齢だ。彼らの成長を、英語の教科書を通して助けようではないか。

私たちは、実践的コミュニケーション能力を育てるべく、執筆陣、編集陣の総力を挙げて、そのための配慮を隔々にまで行きわたらせるよう努力した。

皆さん、この新しい *NEW CROWN* を通して、ともに教育の希望を語ろうではありませんか。

特集 自ら学ぶ力を育てる

いま英語教育に求められているもの

高橋 貞雄 (玉川大学)



英語教育を一步先に進める

NEW CROWN (以下、本文中 NC) の教育理念をご理解くださり、活用していただいている多くの先生方に心から感謝申し上げます。そして現在 NC で学んでいる多くの子どもたち、またかつて NC とともに英語の学びを体験してこられた方々にも感謝を申し上げます、

さて、英語教育の歴史を少し振り返ってみると、ほぼ四半世紀近く前の平成元年(1989)はとても重要な年でした。学習指導要領に初めて「コミュニケーション」の文言が盛り込まれたからです。この間ずっと日本の英語教育はコミュニケーション能力の育成に腐心奮闘してきたと言えます。一方で、世界や日本を取り巻く環境は大きく変容し、今や国際化という言葉さえも聞き慣れたほどです。英語力の育成に対する要請は高まる反面、英語教育の成果では韓国をはじめとする多くのアジア諸国にも水をあけられている現状です。新学習指導要領が施行されるいま、日本の英語教育を一步前進させるときがいよいよ到来したと言えるでしょう。

NEW CROWN が大切にしてきたこと

NC がもっとも重視してきたことは、「人間教育」に資するということです。公教育の中で全員の生徒が英語教育を受ける以上、英語教育を通して1人ひとりの生徒の人的成長に貢献する義務があります。そのために、NC では英語に乗せる素材、つまり「題材」を重視してきました。キング牧師を代表とする人権の問題、広島を素材にした平和教育、その他、ことばと民族、環境保全の問題などは、共生の心を育てたり、思考力や判断力を育成したりする

うえで欠かせないことです。英語教育には文化教育も必然的に伴います。NC は異文化理解教育につながる題材も大切に扱ってきました。世界にはさまざまな文化や伝統や価値観があること、そうしたことを学び理解しながら、それぞれがお互いを尊重していくことが重要だと思っています。端的に言えば、英語教育の目的の1つは子どもたちの世界観を広げることです。異文化理解の題材として、英米だけでなくアフリカやアジアを初めて扱ったのも NC です。この精神は、今後も継承して行くべきでしょう。

もう1つ、英語教育で欠かすことのできない視点が「ことばの教育」です。英語教育は英語を教える教育ですが、英語を通してことばに対する感性を育てたり、ことばについて考えさせたりする教育でもあります。ことばは、ものごとについて考えたり、考えを伝えたりする上で根幹となるものです。人間は多くの場合、ことばを通して他とかわかります。ことばには社会性もあります。ことばには、母語や第二言語や、外国語などのいくつかの層があります。NC はこれまでにケニアやインドのことばについて考える機会を提供してきました。ことばの教育は、アイデンティティを育成する教育です。日本人が身につけるべき英語は、母語話者の英語ではなく、国際語(国際通用語)としての英語である、と考えてきました。NC には、英語の母語話者、第二言語話者、外国語話者、が登場しています。彼らの言語環境は、まさに現在の国際社会で英語が使用されている現実なのです。

NEW CROWN をとりまく現状

学習指導要領が改訂されるたびにもっとも注目さ

れるのが外国語科の「目標」の部分です。現行の学習指導要領では「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎」となっていた部分ですが、新学習指導要領では「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎」となっています。実はNCは、以前から中学校段階では4技能をバランスよく指導することを重視してきました。そうしたことを考えると、今回の改訂内容は当然のことだと思われます。特に、ネットによる言語環境が充実してきたいま、読むことや書くことによるコミュニケーションは従来にもまして必要になってきたと考えられます。一方で、英語教育に携わるものの1人として、いままで4技能を本当に指導してきたのだろうか、と反省せざるをえません。たとえば、読むことについて、どのようにすれば読むことができるようになるか、ということ教えてきたでしょうか。訳読も音読も、授業でよく行われる活動ですが、どちらも英語力の一面をつけるという点では意味があるものの、本来の読む(読み取る)という活動ではないでしょう。4技能の基礎の育成を学習指導要領が求めている以上、特に「読むこと」の指導では一歩先に進める必要があるでしょう。

新学習指導要領を理解する上で重要なことの1つに「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用」があります。これは英語に限らずすべての科目に共通した要請です。当然、英語でもこの点に配慮しなければなりません。英語で言えば、文法(文構造)や単語などを確実に身につけ、かつそれを活用する力をつけるということを意味しています。そうするためのキーになる概念が「繰り返しの指導」と出口(つまり到達目標)の設定です。文法や語彙は繰り返して学び、4技能については総合あるいは統合を含めてCAN-DOの形で目標を定めて指導を行うことが求められていると言えます。

もう1つ現状認識で重要なことは、子どもたちの学習力の低下です。つまり、学ぶ力の弱い子どもがたくさんいるということです。そのために、学習指導要領でも学習習慣をつけることを求めています。これからの英語教育は、今まで以上に学ぶ側に立って学ぶ力をつける、すなわち学び方をきめ細か

く指導することが重要になると言えるでしょう。

英語教科書に求められること

平成20年12月に出版された教科用図書検定調査審議会では「内容豊かで読み応えのある、質・量ともに格段に充実した教科書」を求めています。英語の授業は週4時間、各学年ともに年間140時間の学習を求めていますし、単語に関しては現行の900語程度までから1200語程度にまで増えています。このことを考えると、英語力の育成に大きな期待が寄せられていることが見て取れます。とはいえ、国際基準に照らして見ればそれほど驚くようなことではないかもしれません。

むしろ今後は、教科書に盛り込まれていることをすべて教えるのではなく、教えるべきこと、教えたことが教科書にすべて盛り込まれている、と考えていくべきでしょう。そうすれば多忙な先生方も、経験の少ない先生方も、安心して教科書を活用することができるでしょう。一方、学ぶ側の生徒にとってみれば、単語も文法も自学自習をしたり繰り返しをしたりしながら学んでいけるような配慮が教科書でなされていることが重要になるでしょう。

24NCの3本の柱

24NCは、NCの伝統を継承しつつ、時代の要請に応じて一歩前に踏み出すことにしました。そして新たに以下のような3つの教育目標を設定して教科書を作成しました。

- ① 自ら学ぶ力を育てる
- ② ことばを使う力を育てる
- ③ 他とかがわる力を育てる

新学習指導要領では、思考力、判断力、表現力の育成を求めています。そのための根本が言語力です。英語を使う力はますます求められるでしょう。そして他とかがわるコミュニケーション能力の育成は現代の喫緊の課題です。私たちは、上記で約束した3つの力が新しいNCで学ぶ子どもたちに身につくことを確信し、引き続きご理解、ご支援を賜りますようお願いいたします。

特集 自ら学ぶ力を育てる

学びのプロセスを意識した授業づくり



松沢伸二 (新潟大学)

外国語の学びのプロセス

やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ——人口に膾炙した山本五十六のこの言葉は、教育の要諦を突いている。

山本と同じ時代を生き、日本の英語教育に貢献した Harold Palmer も、同様のプロセスを説いた。それは現在では、PPP という外国語教育で本流の指導手順になっている (Richards & Rodgers, 2001)。3つのPは順に、Presentation (提示)、Practice (練習)、Production (活用) である。

PPP は語学以外の様々な学びにも適合する。例えば、私達は新機種の携帯電話を購入すると、店員や説明書経由で仕組みを理解する (Presentation)。次に各種のボタンを駆使して語句などを打ち、新しい使い方に習熟する (Practice)。最後に実際に送受信するうちに新機種に慣れ、機器の操作よりはメールの内容に集中して使えるようになる (Production)。

新教科書のレッスンの構成

24NC はこの PPP を意識して単元を構成している。次ページに1年生 Lesson 8 の全体を示した。新教科書はどの学年のレッスンも、原則的に次の5種類のページから成る。①とびら、② GET、③ USE Read、④ USE Listen / USE Speak / USE Write / USE Mini-project、⑤まとめ。

このレッスン構成は、「学びの見通しをたてる」とびらのページ (①) で始まり、「知識・技能の習得」を図る GET のページ (②、基礎・基本の学習用) が続く。次に「知識・技能の活用」を図る2種類の USE のページ (③と④、中心的な学習用) が来て、「学

びを確認する」まとめのページ (⑤) で終わる。

各レッスンの USE では、USE Read + USE Listen / Speak または USE Read + USE Listen / Write のページで「総合的」な活用学習を行い、USE Read + USE Mini-project のページで「統一的」な活用学習を行う。なお Use Read については、外国語の学びにおける読むことというインプット活動の重要性を考慮して、全ての課に配置している。

生徒は GET のページで新しい学習事項を提示され (Presentation)、練習する (Practice)。次に、この GET のページで習得した事項を USE のページで活用し、自在に使えるようになる (Production)。新しい教科書はこのようにして、PPP の学びのプロセスに添って、習得ページと活用ページの2部構成で、生徒に確かな学力を定着させる。

授業の実際

次ページ Lesson 8 の新言語材料は、現在進行形である。生徒はまず、とびらでこの課の内容を軽く概観した後、GET のページ左下の POINT で、その形と意味を理解する (Presentation)。次にその下の Drill で形に慣れ、続いて右ページの Practice で (Word Corner の語彙も使い) 意味に注目する練習をする (聞く・話す・書く技能の Practice)。最後に GET の左ページ冒頭の短い文章 (5行ほど) を読み、まとまりのある文章内での現在進行形の働きを理解する (読む技能の Practice)。以上で、現在進行形の「知識・技能の習得」を図る。

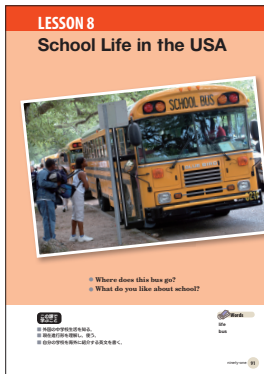
USE Read に進んだ生徒は、習得した現在進行

形の知識を活用して email を読む現実的なタスクを行う（読む技能の Production）。続く USE Mini-project では、学校行事を説明するホームページを現在進行形を用いて完成するタスクをする（統合技能の Production, 聞く+話す+書く）。生徒はこれらのタスクで、新出事項と既習事項を繰り返し使って「知識・技能の活用」を図る。以上は、可能な授業展開の一例である。最後に、まとめでこの課で扱った文法事項や音のルールの振り返りをする。授業時間内でもよいし、家庭学習に回してもよいだろう。

新しいレッスンの構成の意義

以上のように 24NC は、知識・技能の自然な学びのプロセスを反映する PPP の授業を、どの教師もできるように改訂した。PPP は、見る→行う、

とびらのページ (①)



受信→発信, 口頭→書面, 制御→自由, 宣言的知識→手続的知識などの流れを含む。それは、世界の外国語教育で現在主流な教授法である CLT (Communicative Language Teaching) が、個別の言語材料・技能を指導する際に用いる確立されたモデルである (Pachler, Barnes & Field, 2009)。

新しい教科書には中学生が興味を持つ題材を多く用意した。今次の改訂では、教師が生徒の学び意欲を高めつつ、知識の確実な習得と、4技能の総合的・統合的な伸長を弾力的に行えるように配慮した。

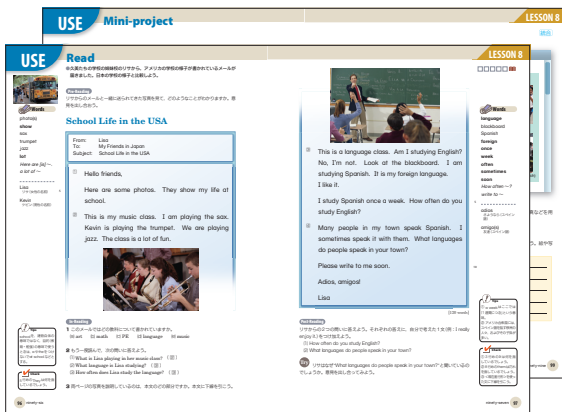
【引用文献】

Pachler, N., Barnes, A. & Field, K. (2009). Learning to teach modern foreign languages in the secondary school: A companion to school experience. Routledge.
Richards, J.C. & Rodgers, T.S. (2001). Approaches and methods in language teaching. Cambridge University Press.

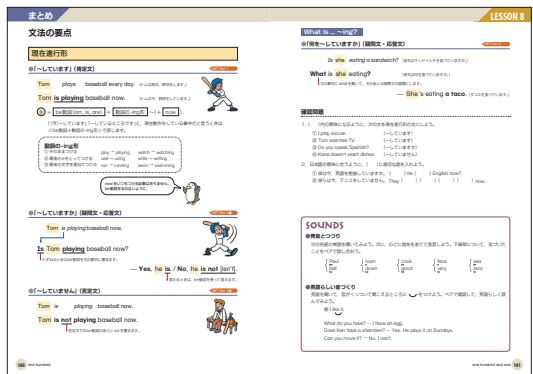
GET のページ (②)



USE のページ (③と④)



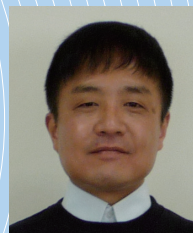
まとめのページ (⑤)



特集 自ら学ぶ力を育てる

USE Read の仕組みと活用の仕方

池野 修 (愛媛大学)



現在のリーディング指導が抱える課題

現在の中学校英語授業では、リーディング指導に關しても様々な工夫が行われてはいるが、課題も少なくないように考えられる。例えば、(1) 英語を読む分量が少ない、読む英文が短い(例えば、高校入試の英文を読めるようになることを中学校3年間の到達目標と考えた場合には、教科書のレッスン本文では不十分と判断されるのではないだろうか)、(2) 読解(reading comprehension)のトレーニングが体系的に行われていない、(3) 本文を日本語に直す、質問に答えるなどの他に活動のバリエーションが乏しく、リーディングの授業は、しばしば「動きのない」「答え合わせの」授業になってしまう、などはそのいくつかである。24NCでは、これらの問題の解決を目指して、新しいタイプのリーディング教材の開発に取り組んできた。その成果の核となるのが、各レッスンのUSE Readである。

USE Read の特徴

英語教科書の「本文」には、(1) 新しい文法・語彙の導入(および既出の言語形式の強化)、(2) リーディング力(読解能力)を高めるためのトレーニング(現実社会での読みreal-world reading tasksを模した活動を含む)、(3) 思考力・感性の涵養(=知的・精神的成長にとって意味のあるメッセージ内容を読み、それについて考えたり、「心」を育てたりする)などの役割が求められている。これらのうち、USE Readは「読解能力の育成」と「思考力・感性の涵養」を中心的なねらいとするセクションである。

USE Readは、基本は見開き2ページで、これを2授業単位時間でこなす想定で作成されている。

従来の教科書本文やリーディング素材と比べて、USE Readには次のような特徴がある。まず第1に、Readの英文は読みのトレーニングに特化した素材文であるという点である。そのレッスンで扱う文型・文法はRead以前に導入し、すでにその練習活動も行っているため、Readでは「読む力」の育成に集中することができる。第2に、従来の教科書本文に比べてReadでは意図的にかなり長めの英文を提示している。それぞれの学年の到達目標に合わせて、1年の最後で140語、2年で190語程度、3年では260~280語程度の英文が用いられており、これは例えば高校入試問題のレベルにもより対応した英文となっている。第3に、リーディング教材とはいえ、単に英文を提示するだけではなく、教科書中に多様な読解活動を配しており、これらをこなすことを通して、重層的に英文の理解を深め、読解力を育成することができるような仕組みになっている。

以下、USE Readの構成を見ながら、様々なセクションの役割やその活用方法を確認してみよう。

USE Read の構成とその活用方法

第1ページ最初にある日本語の導入文は、(A)これから読む英文の場面説明を行う、(B)読みのねらい(=何のために次の英文を読むのか)を設定するという役割を担っている。なお、この導入文で示したねらいは、後述のPost-Reading活動とリンクする。一例をあげると、BOOK 2のレッスン3(For Our Future)では、導入文は「会議が開かれています。パンフレットには、提案者の発表の要旨が掲載されています。あなたはどの発表に興味がありますか。」となっており、3つの発表要旨が英文として提

示される。本文の後に配されている Post-Reading 活動では、「3人の発表の中から聞きたいものを1つ選ぶとすれば、どれにしますか。それはなぜですか。」について発表するという流れである。このように、従来のリーディングに比べて、「何のためにその英文を読むのか」(上述の例では、どの発表を聞か決めるために発表要旨を読む)、「その英文を読んだときに自然に行われる活動とはどのようなものか」を意識して英文および活動を作成している。

導入文に続く **Pre-Reading** は、英文を読む心的状態を整えるために、背景知識を活性化させたり、題材への興味づけを行ったりする役割を持つ部分である。対象テーマについて知っていることをペアやグループで話し合ったり、写真やイラスト等から英文内容を想像してみたりする。教科書レイアウトとしては、この下に本文となる英文が続く。

本文のさらに下に配置されている **In-Reading** は英文を読みながら行う活動であり、(A) 英文の概要を捉えるための活動 (e.g. 本文で出て来た順番にキーワードを並べ替える活動)、(B) 詳細な理解を確認する活動 (英問英答)、(C) より深い読みを促すための活動 (e.g. 読み取った情報を表にまとめる活動、要約文を完成させる活動) の3つの部分から構成される。(B) では、指導要領における「物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること」を行うための問いを提示している。また質問は英語であるが、答えの内容を含む段落の番号がヒント情報として与えてあり、回答作業を支援する工夫も加えている。このように、次第にレベルアップする一連の課題に取り組みながら、英文を重層的に読み、徐々に理解を確かなものにしていけるように In- Reading はデザインされている。

それに続く **Post-Reading** は文字通り「読後」の発展的活動であり、本文の英文の意味を理解した上で、(A) 読みと他の技能(話す・聞く・書く)を統合する、特に「理解」から「表現」への流れを作る活動、(B) 導入文で設定した読みのねらいに合わせた活動(つまり、その Post-Reading 活動を行うために英文を読んだという扱いになる)などから成っている。また、PISA 型読解力の「情報の評価・活用」を意識した活動も一部入れており、本文に求められる「思

考力・感性の涵養」を具現化する部分でもある。

最後に、**Try** は、読み取った内容について自分と関連づけて考えてみる補助的活動であり、適宜日本語で行ってもよい扱いとしている。

これらのメインの要素に加えて、本文の横には、本文題材内容の付加的情報を示した **Tips**、本文中の指示代名詞の示す内容を確認させたり、そのレッスンで習う文法を含んだ文を探し出させたりするための **Check** などが配置されている。

このように、USE Read は(従来より)長めの英文を素材に、多彩な活動を活用しながら「英文の読み方」の指導を行い、自立した読み手を育てられるよう工夫されている。

USE Read の題材と補助教材

24NC では、これまで以上に様々なテキストタイプ、多様な題材を扱っている。英語のリズムを楽しみながら読む Alice and Humpty Dumpty, 姉妹校の生徒からのメール文 School Life in the USA, エアーズロック登山に関する賛否を扱った新聞コラム Uluru, 英語落語の海外公演をしているきみ江さんへのインタビュー Rakugo Goes Overseas, 世界の興味深い家を紹介する図鑑 Houses and Lives, 学んできた「英語」についての寄せ書き English for Me などなどである。

また、現在、USE Read の補助教材(別冊)として『ワークシート集』と『リーディング・アイディア集』を作成中である。前者は、授業中に用いることを想定した Read 用ワークシートであり、スロー・ラーナーのための活動や応用・発展活動、追加の英問なども含むものである。Read をスムーズに教えられるようにするためのサポート資料となる。後者は、教科書に準拠した新たな(発展的な)教材集であり、レッスン毎に(a)その課の文法を強化するための英文と、(b)テーマ内容をさらに深めるための英文を準備し、それぞれに関連の活動をつけている。授業中に補助的に用いることもできるし、定期考査などで英文のみを活用することも可能である。

USE Read とその補助資料の活用により、充実したリーディング指導が行われることを期待したい。

特集 自ら学ぶ力を育てる

「気づき」をうながし、
自ら学ぶ発音指導へ

田邊 祐司 (専修大学)



はじめに

近年の英語発音指導では、教師が「教え込む」のではなく、学習者が「自ら学ぶ」アプローチへの転換が提唱されています (Morley (Ed.), 1987)。では、その「自ら学ぶ」とは具体的にどのようなことを意味するのでしょうか。ここでは 24 年度版 *NEW CROWN* (以下、24NC) の *SOUNDS* の例を紹介しながら、その問題にふれたいと思います。

指導上の問題点

発音指導の伝統的なアプローチは；1) 直感・模倣的手法と、2) 分析・言語的手法、との2つに大別されます。私たちはこれらのアプローチと付随する指導技術 (例：listen-and-repeat, 口腔図など) を適宜、組合せながら指導を行ってきました。

しかし、こうした伝統的アプローチが効果を上げてきたかと問われると、残念ながら YES ! と断言できないのが発音指導の現状です。生徒が発音を苦手とする原因はさまざまですが、教師が一方向的に教え込み過ぎるのも、指導上の問題点のひとつと言えましょう (田邊, 2007)。

気づきをうながす

以上を出発点に近年の指導論では、教師が最初から教え込むのではなく、生徒の思考を誘発する活動を介在させるアプローチが推奨されています。活動を通して、入力 (input) 項目と現状の理解度・技能レベルとの間に横たわるギャップに気づかせ、自己修正を図ろうとするものです。つまり、気づきという自己認識を通してはじめて、入力は「入手 (intake)」へと向うと考えられているのです

(Schmidt, 1990)。これが「自ら学ぶ」の意味するところです。

具体例を示しましょう。先般、出前授業でとある中学校を訪問したときのことです。そこでは、plan の pl という子音連続の箇所、日本語母音の「ウ」を入れて、「プラン」と発音する生徒が多いことに気づきました。

伝統的なアプローチだけで教え込むこともできましたが、まず私が採ったのは話し合いです。英語母語話者の plan (発音機能の付いた電子辞書) と日本人の「プラン」という発音を比較させ、違いを考えてもらいました。

話し合いの中で、日本語の「ア」と ash の /æ/, 「ン」と /n/ などの違いに加え、pl の連続性に気づく生徒が複数、現れました。そこで「では、続けて pl を言うにはどうしたらいいのか？」と発問し、さらにペアで、考えさせてみました。すると、どうでしょう。「上歯の近くに舌をあらかじめ持ってきて // の準備をして、それから /p/ と言うと、/pl/ と連続して言える！」という答えが出たのです！そうです、気づきから発見が生まれる現場に立ち会った瞬間でした。

彼らを徹底的にほめて、そこから子音連続 (結合) が英語の音の特徴のひとつであるという解説を加え、practice や school などの listen-and-repeat 練習へと移ったのは言うまでもありません。

SOUNDS の特色

このような気づきをうながし、発見へとつながるアプローチを、24NC *SOUNDS* ではさらに拡大して導入しました。気づきを重視する *SOUNDS* は、「発音とつづり」と「英語らしい音づくり」の2

部仕立てになっています。前者では個々の音の発音ポイント、および発音とつづり字との関係を扱います。後者では英語らしい音のために必要最低限の項目を精選しました。そのために音声シラバスを作成し、日本人にとって困難な音声項目をリスト化し、そこから各レッスンに配当するという形を採りました。

SOUNDS に込めたのは単なる言語事実 (linguistic

facts) の提示だけではなく、上述したような気づきをうながす活動でした。

「発音とつづり」の事例をひとつ紹介しましょう (BOOK 1 LESSON 4)。この活動では、「同じ音の仲間探し」といった一手間かけた活動を通して、基本母音字には「アルファベット読み」と「フォニックス読み」の2つの読み方があり、アルファベットの発音は単語に組み入れられるとそれぞれ変化するという事実への気づきが起きるように目論んでみました。それから、「e で終わる語において、e の直前の母音は二重母音になることが多い (face, like, nose)」という副次的な「発見」につながるようにも工夫してみました (例外もしのばせてあります)。

今ひとつ事例を見てみましょう (BOOK 2 LESSON 6)。これは同化現象 (assimilation) をめぐるものです。同化を扱った従来の活動は、「変化している箇所を線で結んでみよう」といった類のものが多かったのですが、ここでは活動の処理水準を高め、「単語内にも音変化はあり、変化は単語間でも起きる」という事実を生徒が気づき、発音す

BOOK 1, LESSON 4, SOUNDS

SOUNDS

●発音とつづり

下線部の音に注意しながら、 中の単語を聞いてみよう。次に、下の表にある単語を発音し、下線部が同じ音の単語を 内から選んで () に書き入れよう。

bag but clean home hot leg music nice pick take

a	cat	(bag)	face	()
e	ten	()	Japanese	()
i	six	()	like	()
o	dog	()	nose	()
u	fun	()	use	()

BOOK 2, LESSON 6, SOUNDS

●英語らしい音づくり

左にある2つの単語を続けて読むと、どのような発音になりますか。似ている音を持つ単語を右から選んで、線で結ぼう。次に、英語を聞いて、あとに続いて発音しよう。

- | | |
|-------------|----------|
| thank + you | • shoes |
| did + you | • choose |
| can + you | • June |
| meet + you | • new |
| miss + you | • excuse |

{ miss ~がいなくてさびしく思う }

るときにもこうしたことを意識するようにと願って作成しました。さらに、y (/j/) という半母音は直前の子音に「飲み込まれやすい」というルールに気づきが生まれれば、それは編者冥利に尽きるということです。

おわりに

伝統的なアプローチはもちろん大切です。しかし、最終的には学習者自身が自ら意識し、自分から学び取ろうとしなければ、発音は身につけにくいということも、また事実です。気づきを中核とする、教え込まないアプローチをどう指導に取り込むか、自立的な発音学習への鍵がそこにはあります。24NC がそのための起点となることを願っています。

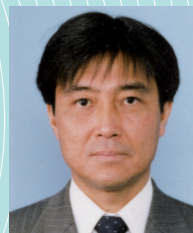
[Further Reading]

田邊祐司 (2007), 「発音指導見直し論から: 音声コミュニケーション指導の「常識」を検証する」『英語教育』9月号
 Morley, J. (Ed.) (1987), *Current perspectives on pronunciation: Practices anchored in theory*. TESOL.
 Schmidt, R. W. (1990), The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11/2.

特集 自ら学ぶ力を育てる

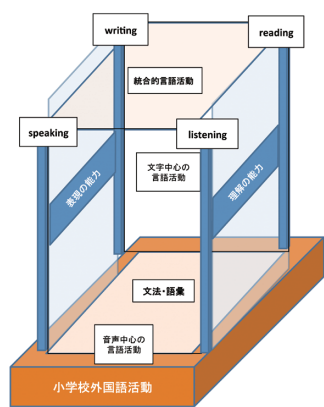
コミュニケーションへの意欲をどう持続させるか
—小学校から中学校へ

重松 靖 (国分寺市立第三中学校)



素地から基礎へ

新しい学習指導要領では、小学校において「コミュニケーション能力の素地」を、中学校では「コミュニケーション能力の基礎」を養うとある。では、『素地』と『基礎』にはどのような違いがあるのだろうか。それぞれの学習指導要領の英訳版(文部科学省)を見ると、“To form the foundation of pupils’ communication abilities...”, “To develop students’ basic communication abilities...”



とある。家を建てることにたとえると、地ならしをし、家を建築するためにしっかりと地盤を固めることを『素地』, 「自ら学ぶ力・ことばを使う力・他とかかわる力」を

土台としながら、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことという4本の通し柱をたて、文法や語彙という床、言語活動という壁や天井をつくり、「家」としての骨格を形づくるまでが『基礎』と言えるのではないだろうか。当然、柱は長すぎたり短すぎたりしてはいけない。床はしっかりとしたものでなければならないし、壁の厚さや強度も均一であるべきである。

NEW CROWN はこうしたバランスを意識し、生徒一人ひとりが意欲をもち、自ら学習できるよう編集されている。

スムーズな移行

生徒がコミュニケーションへの意欲を持ち続けながら、「基礎」を身につけるためには小学校から中学校へのスムーズな移行を心がけなければならない。その際のキーワードは「わかる」「ふれあう」「気づく・考える」だろう。文法や語彙を無理なく、確実に習得し(わかり)、多くの人と実際にふれあいながら英語学習がコミュニケーションに欠かせないことばの学習であることを実感する。さらに、英語と日本語の違いや題材を通して様々な価値観・真理に気づき、人としての生き方について考えるのである。

① BOOK 1 Get Ready

NEW CROWN では、中学校の教科としての英語の学習にスムーズに入っていけるよう LESSON に入る前に、小学校外国語活動用教材『英語ノート』(文部科学省)に登場した表現や語彙を用いた Get Ready (1~4) を配置している。

Get Ready 1 「コミュニケーションを楽しもう」は、『英語ノート』で紹介された「あいさつ」「道案内」「買い物」「気持ちを伝える」「事実を伝える」などの場面や言語の働きを取り上げ、実際に話される英語を聞きながら、視覚を通して場面を考える活動である。生徒たちは、小学校で体験した英語表現を思い出し、イラストを見ながら英語が実際のコミュニケーションの手段として使われていることを実感することができる。また教師は、「どんな言い方をしていたかな?」「どんな単語が聞き取れたかな?」などと質問しながら、生徒がどの程度英語の表現や語彙を知っているのかを把握することができ、以後の指導方針を立てることに役立つはずである。

BOOK 1 Get Ready 1



Get Ready 2「友達になろう」は、
Paul: Hi. My name is Paul Green. I'm from the USA. I play baseball. Do you like baseball?

のように、これから3年間生徒たちが一緒に学んでいく6人の登場人物の自己紹介を聞く。生徒にとって登場人物は、3年間自分の成長と重ね合わせることができる大変身近な存在になる。

内容としては、I like～. I play～. など、小学校の外国語活動で慣れ親しんだ表現や、「スポーツ」「食べ物・飲み物」「野菜、果物」「動物」など、自己表現に適した語彙を使用しているため、生徒たちは無理なく聞き取ることができ、聞いた内容をモデルにしながら実際に新しい友達とふれあう活動へと発展させることができる。教師側もこうした活動に実際に参加しながら、個々の生徒の到達度をより正確につかむことができる。

② We're Talking

Get Ready 1で紹介する場面や言語の働きは、各学年の各LESSONのあとに設けられているWe're Talkingでも取り上げ、実生活に結びついた場面での生き生きとしたやりとりを文字で提示するとともに、これだけは覚えてもらいたい表現をTalking Pointとして明示している。

たとえば、BOOK 1のWe're Talking 1ではカナダの中学校に引っ越した由香ゆかが出会いがしらに

隣に住む男の子とぶつかりそうになり、次の対話をする。

Yuka: Oh, I'm sorry.

David: No problem. Are you new here?

Yuka: Yes, I am. I'm Yuka.

David: Hi, Yuka. I'm David. Please call me Dave.

Yuka: OK, Dave. Nice to meet you.

ここで学習する言語の働きは「あいさつをする」「あやまる」であり、Talking PointはPlease call me Dave.である。SVOCの文はBOOK 3での学習範囲であるが、生き生きとしたやりとりするために必要な表現であれば、それが未習であっても慣用表現として積極的に紹介している。もちろん、こうした表現は「言えればよい」ものであり、正確に書けることまで要求してはいけない。あくまでも表現を深めるためのものであることに留意したい。

ある調査によると、中学生が英語を学ぶ目的として、「テストで良い点がとりたい」や「高校入試があるから」という答えが多いという。英語はことばであり、コミュニケーションの手段であることを生徒たちに実感させ、自ら主体的に学ぶ意欲を育てるためにも「わかる、ふれ合う、気づく・考える」活動を進めたい。NEW CROWNはそうした活動が散りばめられた教科書である。

SPECIAL

TAKAHASHI SADACHI

MATSUZAWA SHINJI

IKEMO OSAMU

TANABE YUJI

SHIGEMATSU YASUSHI

MORI CHIZURU

TAJIMA HISAKO

辞書を積極的に活用する

森 千鶴 (福岡教育大学)



「自ら学ぶ力」と辞書活用

新学習指導要領の理念は「生きる力をはぐくむこと」である。この理念は現行の学習指導要領の理念を引き継いだものであるが、内容はより具体的なものになっている。「生きる力」を説明した文の中でも特に目を引くのは、「自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」という表現である。これらは、「学習者が自ら学ぶ力」を育てることを念頭に置いているのである。英語科における「自ら学ぶ力」といえば、まずは「予習や復習の習慣づけ」であろうが、次にはやはり「辞書の活用」が思い浮かぶ。実際に、新学習指導要領では現行の学習指導要領よりも「辞書指導の必要性」がさらに強調され、「・・・生徒が適宜辞書を繰り返し使用し、調べたい単語を辞書を使って自由に調べるということを普段から行わせる必要がある」と書かれている。

「習うより慣れよ」一段階的辞書指導

24NC では、新学習指導要領に書かれている内容を受けて、辞書指導に関しても充実したつくりとなっている。三段階構成となっており、学習者が一度に「学ぶ」のではなく、少しずつ「慣れる」ことを目指している。

まず第一段階として、BOOK 1 の Lesson 1 から Lesson 4 までに出てくる単語は、巻末「単語の意味を確認しよう」に出現順にまとめてある。たとえば Lesson 1 の新出単語(I, am, hello, excuse...) が、そのとおりの単語の順で日本語の意味が載せてある。これは英語の書き言葉を初めて学ぶ学習者の負担を軽減するためである。

次に第二段階として、Lesson 4 の後には、巻末にまとめてある「単語の意味」の使い方が説明されている。ここからは、「単語が出てくる順番ではなく、アルファベット順に提示されています」(辞書形式)ということ伝えるためである。ここでは「アルファベット順」であることに加え、巻末「単語の意味」の基本的なつくり(「見出し語」「発音表記」「品詞」「意味」「ページ数」)が説明されている。たとえば、Lesson 3 に出てきている play という単語を例にとってみよう。「単語の意味を確認しよう」で調べると、「遊ぶ」とだけ書いてある。しかし、アルファベット順に並んでいる辞書形式の「単語の意味」で調べると、「play [pléi] 動 1. (スポーツ・ゲームなどを)する、～ごっこをする；(～の)試合をする。2. (音楽・楽器を)演奏する。3. 遊ぶ。」とある。学習者はまず発音と品詞を確認する。次に、同じ「動詞」であっても、いろいろな意味があることを理解する。しかも、本文で使われている I play it (kendama) every day. は単に「遊ぶ」というのではなく、「(ゲームなどを)することで遊ぶ」という意味合いであることも分かる。

さらに第三段階として、Lesson 6 の後には「辞書で単語の意味を引こう」というページが準備されている。教科書巻末の「単語の意味」が辞書形式であるために、学習者はここまでのところで辞書の形式にかなり慣れていることが期待される。それに加えて、Lesson 7 から USE Read (まとまった分量の読み物)が始まることもあり、ここで本格的な辞書活用の方法を提示しているのである。注意点として再度、辞書はアルファベット順に並んでいることと、原形(drawsではなくdraw)で提示されていることが示される。そののち辞書も、「見出し語」

「発音表記」「品詞」「意味」という順番で記載されていることが示される。さらに辞書活用の難関であり、巻末「単語の意味」と辞書の最大の違いとしても挙げられるのが、「文の内容に合う訳語を探し、意味を決める」ということである。「単語の意味」では一つの単語に複数の意味がある場合、そのそれぞれに教科書の出現ページが記載されていたのに対して（たとえば play であれば、「(スポーツを)する 33, (楽器を)演奏する 37」）、辞書では当然のことながら、自分で文脈にふさわしい意味を探さなければならない。そこで、ここではその方法が、draw という典型的な多義語を用いて説明されている。

やはり辞書指導を！

24NC はこのように、辞書指導に関して、教科書そのものを用いれば段階的に指導できるようになってきている。とはいえ、これらのページを用いて「説明」を行っても、実際に通常の授業でどのように辞書指導するのかはまた別の問題である。ここでは中学校教諭の優れた実践の一つを紹介する。

内田信也教諭（1999年当時、福岡教育大学附属小倉中学校）の実践における Personal File である。Personal File とは、「自らの表現に必要なだと生徒自身が思った語彙を中心に自分で辞書を使って収集したコミュニケーション用の自分専用辞書のことである（内田，1999）。中学校1年生の授業で、次の手順で指導を行った。

まず、「Let's Try! 英和辞書を使ってみよう」というテーマで授業を行い、その後1週間毎回15分程度を辞書の時間にあてた。次に、「What's 'Personal File'? 引いた単語は記録しよう」として Personal File のねらいと記入の仕方を説明した。最後に、「This is my 'Personal File'. 友達と交流し合おう」として、感想を述べ合う機会を与えた。Personal File で調べる単語は教科書以外でもよいとし、特に限定はしていないが、自分の調べたい単語を毎日一つずつでよいから辞書で調べ、File を作成するようにすすめた。生徒の作った File の中から実例を紹介すると、たとえば hello であれば、発音記号や品詞、意味（「やあ、こんにちは(気軽なあいさつ)」)のほか、いわゆる語法(電

話では『もしもし』にあたる。『ただいま』『お帰りなさい』の場合にも使う!!) など、自分の興味ある事項を書き入れている。内田教諭は文化的な背景や語源について調べて書き入れてもよいとしている。

辞書は指導するのも、実際に引くのも「面倒なこと」の代名詞のように考えられがちである。しかし上記の実践のように、まずは教科書巻末を使うなどして辞書形式に慣れさせ、次第次第に辞書を引くことそのものに、さらには英語自体にも興味を持たせることは可能である。学習者がいったん使い方を覚えて単語の意味を調べ、1文でも英文の意味が分かれると、パズルが解けた時のような達成感が得られる。もちろん、自己表現にもつながる。それこそが「自ら学ぶ力」の源といえるであろう。

辞書で単語の意味を調べよう

① 次の単語をアルファベット順に並べよう。

cat cap beautiful coach bag

② 次の文の'draws'の意味を、辞書で調べよう。

☞ Koji draws pictures very well.

③ 辞書で単語の意味を調べるときには、次の点に注意しよう。

[1] 単語はアルファベット順に並んでいます。

[2] draw は動詞の原形(もとの形) draw に -s をつけて、「3人称単数現在形」になっています。draws を辞書で調べるときには、-s を取り、動詞の原形 draw で探します。

- A 見出し語
アルファベット順に並んでいます。
- B 発音表記
- C 品詞
略語で示してあります。
☞ → 名詞、☞ → 動詞
- D 意味

④ 見出し語の draw が見つかったら、品詞の部分を見よう。

見出し語の draw の品詞には動詞と名詞とがあります。例文の draws は動詞ですので、動詞の説明を見ます。

⑤ 文の内容に合う訳語を探し、意味を決めよう。

例文では、draws のあとに pictures「絵、写真」がきますので、見出し語 draw の動詞の訳語として「(絵を)かく」という意味が文の内容に合います。

例文は、「ゲームはとても上手に絵をかきます」という意味になります。

⑥ 次の下線の語の意味を、辞書で調べよう。

These chairs have special wheels.



draw [drɔ: 'rɔ-]

動 (線を引く、絵をかく)
引く、引き寄せる

☞ ① (線を引く): (鉛筆)ペン・クレヨンなどで絵などをかく。☞ (画筆) paint は「絵の具で絵をかく」。

☞ ② 引く、引き寄せること。
☞ 引き分け(試合)
* The game ended in a draw.
その試合は引き分けに終わった。

BOOK 1 p.75 辞書指導のページ

【参考文献】

内田信也(1999)「表現力を伸ばす指導過程の研究 III. 学習ストラテジーの実践」『研究紀要』第12号。福岡教育大学教育学部・三附属中学校。

特集 自ら学ぶ力を育てる

付録の活用法

—自身の世界の著者になる

田嶋 美砂子 (星美学園中学校・高等学校)



「自ら学ぶ力」は、「学習者の自律性 (learner autonomy)」を連想させる。諸説あるこの概念の定義のうち、深く共感するのが「自身の世界の著者になること (to become the author of one's own world)」(Pennycook, 1997, p. 39)である。この定義は、学習者個人の心理や認知を超え、学びが遂行される社会的、文化的コンテキストにも目を向ける必要があることを示唆している。

では、日本の中学生が英語を学ぶコンテキスト、すなわち「公教育」かつ「外国語としての英語 (EFL) 教育」の場で、生徒が自身の世界の著者になることを手助けするために、私たち教師は、何ができるのでしょうか。ここでは、24NCにおいて大きな力を注いだ付録に焦点をあて、考えてみたい。

付録概観

24NCを手にすると、実に多くのページが付録に割かれ、また、内容も充実していることがわかる。例えば、BOOK 1の構成は、以下の通りである。

- ・ Further Reading
- ・ 教室でよく使う英語
- ・ 絵でわかる英語のしくみ
- ・ つづりと発音【母音】
- ・ 単語の意味を確認しよう
- ・ 単語の意味
- ・ ローマ字表(ヘボン式)／数の言い方
- ・ 英語の筆記体
- ・ いろいろな単語

学年が進むと、「つづりと発音【子音】」(BOOK 2)、「英文手紙の書き方」(BOOK 2)、「不規則動詞活用表／早口ことば」(BOOK 2, 3)、「基本文のま

とめ」(BOOK 3)などが新たに加わる。また、Further Readingの数も段階的に増えていくので、生徒の成長に応じた指導ができる作りとなっている。

「絵でわかる英語のしくみ」

このコーナーは、名称からも推測できるように、生徒が理解するのに苦慮すると思われる英語の特徴(以下の一覧を参照されたい)を視覚的に説明することを目的としている。

[BOOK 1]

①語の順序 ②動詞 ③人称 ④名詞と冠詞 ⑤代名詞(人称代名詞)

[BOOK 2]

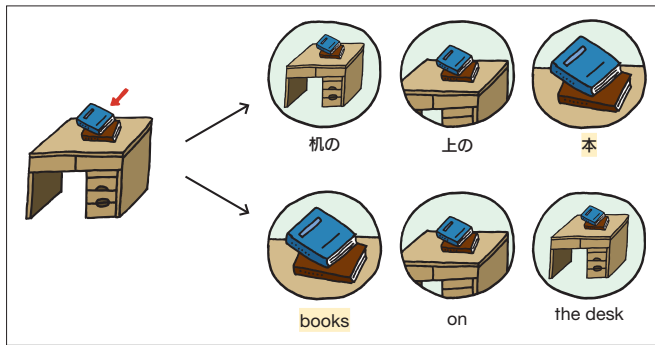
①たずね方と答え方 ②名詞のつくり方 ③いろいろな助動詞 ④いろいろな前置詞

[BOOK 3]

①時制 ②日本語と英語のちがひ

例えば、BOOK 1の「④名詞と冠詞」では、理解しやすいイラストで場面を設定し、可算名詞と不可算名詞、定冠詞と不定冠詞の使用法の違いを描写している。また、BOOK 2の「④いろいろな前置詞」では、「位置」を示す前置詞(on, in, atなど)の核となる意味(例えば、onの「接触」)を絵で表現することにより、一義的になりがちな訳語での説明を超え、前置詞のより適切なイメージを提供している。

このコーナーのさらなる特徴は、視覚的表象に加え、生徒が持つ日本語の知識も活用できる点である。例えば、BOOK 3の「②日本語と英語のちがひ」では、日本語の発想で描かれた絵と英語の発想に置きかえられた絵を対比させ、それらが最終的に両言語における語順の相違につながることを示している。



BOOK 3

「絵でわかる英語のしくみ」

②日本語と英語のちがいを

外国語学習に母語を介在させることは、賛否が問われるかもしれない。しかし、生徒の大半は、成育過程において日本語を習得し、それを通じて公教育を受け、日々思考力を養っている。その日本語を意識的かつ自覚的に使用し、外国語の1つである英語と向き合う行為は、言語そのものを理解する上で、大変重要なことであるように思われる。

「絵でわかる英語のしくみ」では、それまでの学習事項が親しみやすい形でまとめられている。教科書を何気なくパラパラとめくっていたら、思わぬ気づきがあった、つい読みふけてしまったなどという生徒がいたとしたら、うれしい限りである。

「いろいろな単語」

このコーナーの特色は、単語が「学校」、「教室の中にある物」、「スポーツ」、「衣類・身につける物」などの項目ごとに分類されており、一覧できる点にある。また、「1日の行動」という項目では、朝起きてから夜眠るまでの動作表現がほぼ網羅されているなど、単語レベルを超えた言い回しのリストもある。さらに、学年が進むと、「環境」(BOOK 2, 3)や「平和」(BOOK 3)といった難易度の高い項目が加わり、発展的な学習を促すことが可能な構成となっている。

さて、これらを授業内で最も効果的に活用できるのは、各課の後半にある USE の Mini-project や Write に取り組むときであろう。例えば、BOOK 2 では、「私の夢」についてスピーチの原稿を作成し、実際に発表する Mini-project が用意されている。なりたいものはあるが、英語で何と言ってよいのかわからないという生徒には、46 名の職業が列举された「職業」の項目を参照させるとよい(もちろん、なりたいものがないと訴える生徒には、別の対応が

必要である)。

BOOK 3 には、日本について説明する Mini-project がある。モデル文は、例として浴衣、提灯、かき氷を挙げているが、「いろいろな単語」にある「日本文化・日本の行事」を活用し、伝統芸能や祝日を紹介することもできるであろう。さらに、BOOK 3 の最後には、20 歳の自分に向けて手紙を書く Write の活動が配置されている。ここでは、「思い・考え」の項目にある expect, believe, guess, imagine, decide, wonder などの動詞を用いながら、未来への気持ちをつづり、中学校における学びの集大成としてくれたらと願っている。ちなみに、この Write には、「20 歳になったときに読み返せるように、手紙の清書をしよう。」という指示がある。提出された清書を教師が大切に保管し、生徒が 20 歳を迎えたときに全員集合、返却という試みも面白いかもしれない。

私の勤務校は、1 学年 3 クラスの小規模校である。それゆえ、甚だ手前味噌ではあるが、面倒見がよいことを特色の 1 つとしている。一方、反省点として職員室内で常に挙げられるのが「自ら考え、学ぶ生徒をきちんと育てているであろうか」という問いである。学びのよき同伴者となりつつも、与え過ぎず、自発性を大切にしつつも、働きかけは止めない。そんな隘路を歩みながら、24NC を通じ、生徒一人ひとりが自身の世界の著者になることができるよう、サポートしていけたらと考えている。

【参考文献】

Pennycook, A. (1997). Cultural alternatives and autonomy. In P. Benson & P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning*. Longman.

TAKAHASHI SADAO

MATSUZAWA SHINJI

IKENO OSAMU

TANABE YUJI

SHIGEMATSU YASUSHI

MORI CHIZURU

TAJIMA MISAKO

24NCで本文イラストを担当しているイラストレーターの加藤アカツキさんのオフィスをお訪ねしました。ビルの最上階にある明るく見晴らしのよいお部屋でお話をうかがいました。[加藤さんが描いた24NCの6人のメインキャラクターを裏表紙で紹介しています]



「教科書の仕事と単行本や雑誌の仕事とはずいぶん違いますか？」

僕たちイラストレーターは常日頃、仕事の中で“やりたいこと”と“やらなければいけないこと”とのバランスを計りながら絵を描いています。

仕事の中には、守らなければいけない多くの条件があり、それを制約と言ってしまうのはちょっと言い過ぎかもしれませんが、とりわけこの教科書の仕事にはそうした‘制約’が他の仕事に比べて格段に多くあるように思います。

かといって、ただそれらの‘制約’どおりにイラストを描いているだけでは、今度はひどく面白味のないものができあがってしまいます。

生徒たちが3年間楽しく勉強できるように、感情移入しやすく愛されるキャラクターを造形すること、そしてページを繰った瞬間、そこで何が起きているのか知りたくなるような魅力的な画面作りをめざして、残されたあまり大きくない自由度の枠の中で何度も試行錯誤を繰り返しました。

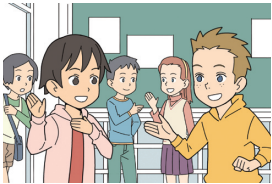

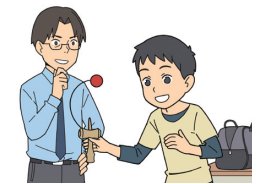






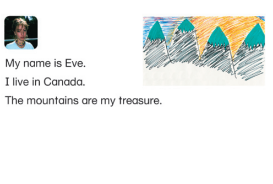


「教科書にとってイラストはどんな意味をもっているのでしょうか？」

文章だけでさまざまな状況を説明したり、またそれを読んで理解したりするのはとても大変です。ましてやそれが慣れない英語の、しかも短い文章となればなおさらです。

僕たちは普通の会話の中でも、そうと気づかないままにボディランゲージを駆使して多くの言葉を補完していて、それが意思や情報を伝えるための有効な手助けになっています。

教科書の短文だけでは伝えきれないことも、キャラクターの表情や動きを表現したイラストを加えることによって、生徒たちが状況を把握するのを手助けしてくれるでしょう。それが教科書の中のイラストの重要な意味なのだと思います。

題材内容一覧★ BOOK 1

<p>LESSON 1 人間理解</p> <p>I am Tanaka Kumi</p>  <p>中学校生活の始まりです。あいさつと自己紹介から、新しい人間関係がスタートします。</p>	<p>LESSON 2 人間理解</p> <p>My School</p>  <p>ALTの先生に、学校の様々な場所を紹介します。図書館で、英語と漢字を合わせた書道の本を見つけます。</p>	<p>LESSON 3 日本の伝統文化</p> <p>I Like Kendama</p>  <p>好きなものを紹介し合います。けん玉、剣道、三味線などの日本らしいものが登場します。</p>	<p>LESSON 4 自然・環境保護</p> <p>Field Trip</p>  <p>校外学習でキャンプ場へ出かけます。自然に囲まれて、環境のためにできることを考えます。</p>
<p>LESSON 5 異文化</p> <p>Our New Friend from India</p>  <p>インドから新しいクラスメートのラージがやってきます。ラージは、カバディというスポーツを紹介します。</p>	<p>LESSON 6 人間理解</p> <p>My Family in the UK</p>  <p>ALTのブラウン先生が、故郷の家族とスコットランドについて紹介します。</p>	<p>LESSON 7 共生社会</p> <p>Wheelchair Basketball</p>  <p>車いすバスケットボールをとおして、様々な人々がいっしょに暮らせる社会について考えます。</p>	<p>LESSON 8 異文化・ことば</p> <p>School Life in the USA</p>  <p>アメリカの中学校生活を紹介します。カフェテリアでのランチやジャズの授業風景などが新鮮です。</p>
<p>LESSON 9 日本の伝統文化</p> <p>Four Seasons in Japan</p>  <p>エマによる、日本の季節行事の体験記。花見、お盆、運動会、お正月などの機会に人々とふれ合います。</p>	<p>Start Reading 多様性</p> <p>My Treasure</p>  <p>My name is Eve. I live in Canada. The mountains are my treasure.</p> <p>『「たからもの」って何ですか』より。海外の子もたちが、自分にとってのたからものを紹介します。</p>	<p>LET'S READ 1 英文学</p> <p>Alice and Humpty Dumpty</p>  <p>『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』より。リズムのよいチャンツ風の文章で、音読もさらに楽しく。</p>	<p>LET'S READ 2 学び・安全</p> <p>A Girl Saved Many Lives</p>  <p>2004年の実話より。大津波から人々の命を救った英国人少女の物語。学校での学びが実生活で役立ちます。</p>

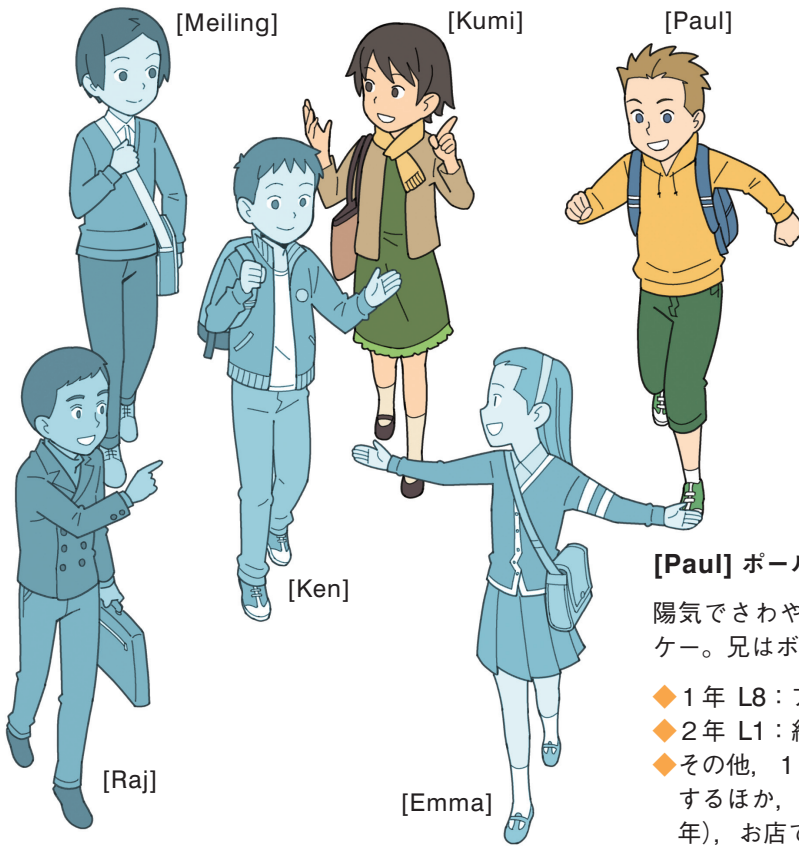
Further Reading

Little Mouse Wants an Apple



大人気絵本『りんごがたべたいねずみくん』の翻案です。個性を生かして目標を達成するまでの物語。

24NC のメインキャラクターたち ① Kumi & Paul 編



[Kumi] 田中久美 [日本]

好奇心・探求心に富み、人望厚く、世話好き。剣道が大好き。

- ◆ 1年 L3：お得意の剣道を語る。
L7：車椅子バスケットボールの試合をレポート。
- ◆ 2年 L2：クリーンアップデーの報告をする。
L5：花火師になる夢を語る。
- ◆ 3年 L1：好きなことばについてスピーチ。
L6：キング牧師の本を語る。
- ◆ その他、多くのページに登場します。

[Paul] ポール・グリーン (Paul Green) [アメリカ]

陽気でさわやかな正義漢。スポーツなら何でもオーケー。兄はボブ (Bob)。

- ◆ 1年 L8：アメリカの中学校の昼食事情を語る。
- ◆ 2年 L1：絵日記を公開する。
- ◆ その他、1年 L4, L6；2年 L3；3年 L1, L6 に登場するほか、博物館でトイレの場所をたずねたり (1年)、お店で買い物をしたり (2年) します。

『NEW CROWN 指導用 DVD』のご案内

■平成 24 年度版 *NEW CROWN* に完全準拠。

各巻スクリプトつき。

■映像・音声を通して、教科書の内容をいきいきと効果的に提示。

■収録内容

① 各レッスンの GET, We're Talking

ドラマ映像。各国出身の少年少女が教科書のキャラクターに扮し、教科書の筋書きどおりに演じます。教科書の場面・内容がいっそう身近なものに。

② 各レッスンの USE Read, LET'S READ

ドラマ・アニメーション映像とドキュメンタリー映像を併用。ドキュメンタリー映像の制作にあたっては、国内外の各地で撮影を行いました。生徒たちの目がくぎづけになること必至の映像です。



三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□ 本 社	〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14	TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
		TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)
□ 大阪支社	〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3	TEL. 06 (6341) 2177
□ 名古屋支社	〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F	TEL. 052 (252) 9211・9212
□ 九州支社	〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1	TEL. 092 (531) 1531・1532
□ 札幌営業所	〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F	TEL. 011 (616) 8722